大阪■■哲学学校■■通信

No.31 2005. 1.22.

大阪哲学学校運営委員会 Copyright©, 2005
【郵便振替】01170-1-81313
【E-mail】contact@oisp.jp
【Home Page】http://oisp.jp/
【Net Forum】ホームページに会議室を開設
【代表者】 山本 晴義（校長）
【発行者】 平等 文博（運営委員長）
【編集者】 平等 文博

二〇〇五年を迎えて

山本　晴義（校長）

二〇〇五年を迎えました。今年は第二次世界大戦が終わって六〇周年にあたります。新年を迎えて、いきなり私の目に焼きついたのは次の二つでした。

一

一つは一月二四日、国連が「アウシュビッツ強制収容所解放六〇周年」を記念する特別総会を開くことが決まったこと、ドイツをはじめ欧州の各国、各都市で平和の集会や式典が大々的に行われることが明らかになったことです。戦後、ナチスの過去と真剣に向きあってきたドイツの現首相、シュレーダー首相は、昨年六月六日行われた「ノルマンディー上陸作戦」六〇年式典で、「われわれドイツ人は誰が罪を犯したかを知っている。われわれは歴史の前に責任を自覚し、真剣に考える」と述べました。

ところがこれと、ほぼ同じ日、かつて侵略戦争を行った旧日本軍の「従軍慰安婦」問題をとりあげたＮＨＫ特集番組（二〇〇一年一月三〇日放送）に対して、政権の中枢にあった政治家が憲法も放送法も無視して介入し、日本の侵略の歴史を美化し責任をのがれようとしたことが内部告発によって明らかになりました。私はこの世界と日本、ドイツと日本の落差に愕然としました。

確かに六〇年前、私が学徒動員から復員してから、日本は平和憲法、教育基本法を掲げ農地改革、財閥の解体、そして労働組合の拡大など、民主化が行われました。しかし、また他方、米ソ冷戦体制のもとで朝鮮戦争を転機に日本を反共の基地として、「逆コース」、軍国主義化が行われてきたことも御存知のとおりです。

五〇年代から七〇年代にかけて日本の資本主義は「パクス・アメリカーナ」「フォーディズム」にしたがってテレビ、自動車や家庭電器など新しい耐久消費財の大量生産・大量伝達・大量消費による高度経済成長、「新中間層」の増大、「福祉国家」、高度大衆消費社会が発展しました。

六〇年代の安保改定反対運動は、社会党・共産党や労働組合や学生運動などを中心に大きくもりあがりましたが、私が注目するのは六〇年代中頃から「フォーディズム」が崩壊し、大量廃棄、産業廃棄物、排気ガス、廃液の放出による環境汚染や様々な公害病を生みだし、ここか

ら消費者運動、反公害運動、環境保護運動や革新自治体をつくる運動など市民の日常生活世界における多様な運動が噴出したことです。また「管理社会」化した「福祉国家」や、国権主義・官僚主義的な社会主義諸国家や「旧左翼」に対する「異議申し立て」、それに第三世界、ベトナム反戦運動などが、スチューデント・パワーに見られるように国境を越えて世界的な規模で高揚したことです。

政治と言えば、もっぱら「国家」あるいは「階級闘争」をめぐる問題（「政治革命」）だと考えられていたのが、「社会」のさまざまな領域でいわゆる「ライフスタイルの政治」（「社会革命」）が姿を現わしてきました。

二

今一つ新年に私の目に焼きついたのは、九日の朝日新聞に、“セイコー”が今年成人式を迎える人に「今の自分の『時価総額』はいくら？」とアンケートをしたところトップが「〇円」で、フリーターや通学も仕事もしないニートが多く、圧倒的に将来への不安をかかえていると報じていることでした。

端的に言って私は、その根拠は、特に八〇年以降、猛烈な情報化がすすみ、地球規模の「グローバリゼーション」が拡大し、そして弱肉強食の「新自由主義」が荒れ狂っているところにあると思います。戦後発展した「福祉国家」がしりぞき、「市場社会」「競争社会」「自由化社会」の中で、国も会社も家庭も地域社会も、まるで枠のない「むきだしの個人」になってしまっているところにあると思います。

私たちの課題は「六八年」に見られたもの――皆が横にアソシエートし合うこと、日常生活世界の中でも、また一昨年二月一五日の世界六〇ヵ国、六〇〇の都市で行われた約一千万人のイラク反戦・平和のグローバルな運動に見られるように、多様なアソシエーションのネットワークを実践していくことだと思います。

来年正月には開校二〇周年を迎える大阪哲学学校も、会員の皆さんのいろいろの視点に立って、にぎやかな討論をやっていきたいと思っています。

運動誌・研究誌

◆哲学学校の会員や参加者の中には、それぞれの関心からさまざまな市民運動や研究会に参加・運営をしておられる方があります。そうした方々が、お書きになった文章や活動紹介を兼ねて出版物などを送ってくださいます。最近は次のようなものをいただきました。会員交流の一助としてご紹介いたします。（※各連絡先を知りたい方は哲学学校事務局までお問い合わせ下さい）

●『ニューズ・アソシエーティブ』第 221 号（2005.1.10）、経済研究会発行
「スマトラ沖地震大津波被害と国際貢献」「アメリカに於ける宗教復興と世界政治への影響」

●『季報・唯物論研究』第 90 号、『季報唯研』刊行会発行　特集「グラムシ獄中ノート研究３」
松田博、小原耕一、小澤卓也、田畑稔、室伏志畔、木村倫幸、大藪龍介、ほか執筆

●道路公害から生活をまもる『みちしるべ』第 32 号、阪神間道路問題ネットワーク発行
「道路公害反対全国交流集会参加報告」ほか

Welcome! Our New Member

戦後６０年の節目の年に

松田　博（会員）

哲学学校のとりくみには以前から注目しておりました。

ある歴史学者からつぎのような話を聞いたことがあります。明治維新、自由民権運動、大正デモクラシーの時期には各地で無数の学習サークル（塾）ができ、それが草の根からの運動の土台となったそうです。

生涯学習の時代、「生涯一市民」の気概をもって、主権者意識をサビつかせないよう学んでいきたいと、戦後６０年の節目の年に決意を新たにしているところです。１０年後の戦後７０年を「戦前」とさせないためにも。（2005.1.15）

いただいた年賀状より（抜粋）
ー新年の抱負などー

※この他にも多くの方から年賀状をいただきました。有り難うございます。

◆憲法をめぐって激しい年になりそうです。思いを集めて武器に負けない言葉に変える。そんな年にしたいと思っています。一層のお力を！（吉田永宏さん、講師）

◆時廻り生まれし干支に戻りたり
熱き想いの未だあせねど
（やすいゆたかさん、会員）

◆昨年は勤続３０年を記念して、ヨーロッパへ研修旅行。国際教育学会での発表、韓国への修学旅行と土日もなく無理をしすぎました。韓流の「冬のソナタ」に涙した心の原点を見つめ、もうすこしやさしさを取り戻したいと思います。
本年は『君が代の起源』（明石書店、１月）、古代史事典など３年かかった仕事をまとめます。水泳、散歩、スキーなどで体重とのたたかいも（？）。
（藤田友治さん、会員）

◆昨年出版した『入門　社会経済学』（ナカニシヤ出版）は、幸い多くの読者をえることができました。今年は制度の補完性に関する３年間の共同研究の成果を出版したいと思っています。（宇仁宏幸さん、会員）

◆身体（脳味噌も入れて）の老衰は仕方ありませんが、中島みゆき氏の詩にあやかって老衰いう名の鎖を身をよじってほどいていき、私の課題「人間とは何んだろうか」に取り組みたいと考えています。（上野山定由さん、参加者）

◆今年は手初めに「越境としての古代」３号と『南船北馬の向こう側』をまとめ、1 月 29 日の東京の霞山会館での第九回国際教育シンポで幕開け。
さてそれから思考をどこへ巡らすか。
暮れに５度目の入院、手術で、腹を押さえ出てきたが、今年も驚き桃の木を楽しみにぶらっと行くか。
（室伏志畔さん、講師）

◆いつもお便りを頂き有難うございます。ものの見方､考え方を広く深く知識、智慧へと多重多層的にする為に利用させて頂いてます。（住村昭男さん、会員）

◆去年の講演では自分自身いろいろ勉強になりました。今年もよろしく。
（捧　堅二さん、講師）

◆本年こそまたかつてのように大阪哲学学校の活動に参加できるよう仕事その他の都合を調整していくつもりです。（橋本直樹さん、会員）

◆今年も「活憲でいこう」「ＮＰＯは社会を変える起爆剤」をキーワードに講演や執筆に励みたいと思います。「希望」の見える年になりますように。（辻元清美さん、講師）

経済的憂国論

五福　久雄（会員）

来年度より私の経営する事業が新しいシステム（新法）の制定により、許可制となりました。国からのお墨付きを受ける為には期限内に一定の課題をクリアーする必要があり、１０月から約２ヶ月間その対応に忙殺されていました。その中の一つに借入金を表す欄があり、その額がネックとなって、許可の取得にクレームがつきました。結果的にはここ３期の決算書を添付する事でことなきを得たのですが、私はこの国のやり方と将来に大きな疑問を感じました。本来私は無借金経営を旨としています。そんな私やり方でも事業経営の上で借入金は必ず発生します。事業者から言わせれば借り入れの額、それ単体はなんら問題にはなりません。簡単にいいますと預貯金が借り入れの額を上回っていれば、それは無借金と同じ事なのです。しかしこの国のお役人は事業の規模も預貯金の額も把握することなく、借入金の額だけを問題にしています。一つの事業体がこの事業を営むのに適しているかどうか、その審査の専門官である役人の経済の知識がこれなのです。

私は国に、特に現在の日本の経済状況に非常な危機感をもちました。国は毎年毎年赤字予算を執行し、その穴埋めの国債発行による借金で国の財政は倒産寸前です。それでも日本がこれまで国際経済の中でその信用力を保ってこれたのは、国民の預貯金の総残高が、国の総借金の額を上回ってたからです。しかし、ここにきて、国の借金が、国民の総預貯金を上回ることとなりました。当然日本国債の売れ行きは落ち込みます。そこで国は個人をターゲットにした国債、いわく１万円から買える国債、元本金利保証、いつでも払い戻しの利く国債、と市場の低金利を追い風に、国債大売出しを始めました。よそで借金できなくなったオヤジが子どもの貯金を借りて、生活費に当てているなんて事が隣近所で噂になれば……、ましてそのオヤジに何の危機感もないとなれば……。その家の信用はがた落ちです。国債経済において日本の信用力が一気に低下するのは、もはや時間の問題ではないでしょうか。そうなると日本国に在住する私たちの生活はいったいどうなってしまうのか？国債の信用力低下にともなって、円の信用力が暴落し、その価値が大幅に下がってしまう、すなわちハイパーインフレの到来です。

日本はかつて戦後にこのハイパーインフレを経験しています。ハイパーインフレが到来したとき国民は一斉に金融機関からの貯貯金の払い戻しに動きました。そのときに国はどうしたのか？金融機関の凍結です。国民が銀行に預けてある個人のお金を勝手に引き出すことができないように統制し、その間も続いたハイパーインフレによって貨幣の価値がどんどん下げられ、凍結解除されたときには、国民の資産は紙切れ同然になってしまいました。それと同時に国は新札を発行し貨幣の単位の銭をすべて廃止しました。こうして国は国民の資産を合法的に奪い取ってしまったのです。また同じことが起きるのではと思えるような今の日本の状況です。だからこそ、今のうちに資産を海外に移しておくことが必要であり、インフレ終了後に再び資産を日本に戻すことでその価値を何十倍にもひきあげることが可能です。だからあなたの大切な財産を今、わが社に！！などという輩は１００％インチキですから気をつけましょうね。そのときは自分の貯金などあっさり諦めて……。

などと取りとめもなく考えていると、今の政治家や役人に猛烈に腹が立ってきました。そして彼らを放任し、やりたい方題を許してきた私たち＝一般大衆も拙かったんじゃないかと思うのです。ではどうしていれば良かったのでしょうか、私たちにできた事は、選挙で私たちの代表を、私たちの思いを代弁してくれる人を国会に送る事でした。で結果は？　私の選んだ大阪府知事横山ノックは……。うーん、もっとしっかり考えて、もっといい人を選ばないと。あっそうそう、この前お話を聞いた辻元清美さん、あの人なんかいいんじゃない？もうお金の問題もないだろうし、博識で美人だし、実行力も今の政治家よりはるかにって何言ってんだろう、考えれば私自身単に一度話しを聞いたと言うだけの事で彼女の政策も良く知らないし、実に曖昧な基準で選んでますね。選挙って本当に私たちの意思を反映できるのでしょうか？ましてや選ぶ対象が限定されてるわけですから。

前回おこなわれた高野山大学の政治学の先生、捧堅二氏の講演「思考実験で考える政治学入門」に参加して意見を伺いました。—だからある評論家が言うのです、「選挙にいかんアホが居る」と。これは言い過ぎではないでしょうか！！本当に選挙に行かなければならないのでしょうか、「民主制」とは人民による統治、または人民による自治であり、カール・シュミットによると、統治者と被治者との同一性（『憲法理論』）であるといわれています。今日のリベラル・デモクラシーは本当に代表者と代表される人々との間に同一性があるでしょうか。古代ギリシャの「民主制」を考えると「代表者」と「代表される人々」との同一性を可能にする為、「くじ引きによる代表者の選出」「命令的委任」「随時のリコール」「ローテイション」を取り入れる必要があるのです。現在の「代表者による統治」は確かに民主主義の次元を持ってはいますが、「代表者」の「代表されるもの」からの「部分的独立性」、あるいは両者の分離に立脚しており、本質的には「貴族制的な」性質を持っています—と。（乱暴でいいとこ取りの引用、申し訳ありません）。

やっぱり今の選挙では「イギリス人は自由だと思っている。しかし、彼らが自由なのは選挙の時だけで、選挙が終わったら元の奴隷に戻ってしまう」（ルソー『社会契約論』）、また「選挙制度は最も手腕にとんだ選挙運動家に権力を手渡すものにすぎない」（Ｈ・Ｇ・ウェルズ）ってことになるようです。（もちろんこのフレーズも捧氏のパクリです）ここらへんに現在の選挙に於ける投票率の低さの原因があるのではないでしょうか？では現行の選挙を拒否したらどうでしょう。「もし投票率が５０％を割れば選挙は成立するのか？マジョリティは非選挙民が握ることになる。もし５０％を割りつづければどうなるのか？政府は存続し得るのか」こんな考え方は一種のアナーキズムかも知れません。しかしもし「選挙止めよう運動」を提唱したら一定の理解は得られるように思います。ましてやこれだけＩＴの進む世の中です。直接民主制＝国民投票も不可能ではありません。一般大衆の思いどうりの政治をする事が本当によいことかどうかの疑問は別にして、新しい選挙制度を議論する口火にはならないでしょうか？

ルソー

【講師への手紙】

捧さんのお話をうかがって

中村　りょう子（会員）

去る１２月１１日の御講演ありがとうございました。

私には今年中の印象深い講座のひとつになりました。（大阪哲学学校以外もいろいろ含みます）

捧さんのパーソナリティの“基”のところの明快さを一番に感じます。その上の地表上でご専門の政治学のご研鑽がなされていて、現在時点ではっきり言える事と、言えぬことや、ご自身の位置が明快（声という身体性も大事に含んで）に語られましたので、私のようにおずおずと座っている者が気がつけば背を伸ばして、耳や脳を前に突き出して聞いていました。

今朝（１２月１５日）日経誌上で、米英の軍事専門家三人のインタヴューを読んでいまして、彼等が地球世界をにらみ渡して考える範囲というものが､あくまで軍事政策であり、最新鋭の戦略軍事機器の性能確認や配備であってみれば（恐らく彼らのライフワーク)、私には“幼少年の戦争ごっこ”じゃないか、「俺んちにゃ、もっと凄いのあるぞ、やったろか！！」に見え、又、いい大人が日夜、画面でインベーダーゲームや映画シナリオのようなシミュレーションに加熱興奮しているんじゃないか、莫大な金と人間エネルギーを費やしているんだと思えます。

机上のものを試作、開発すれば、その得意は必ずや試しにも使いたくなろう。

文化領域と異なり、これ程“力”の具体的、即時の結果はないのだから｡おもしろかろう、己が身すら安全ならば。

人類は、究極まで競い合ってここに至ったのだから、軍事戦略とは全く違った“領域”を共有して生きのびる“シンプルな形”を見い出すのは不可能なのか？

人的エネルギー資源、その可能性を追い詰め合うことと逆へ、クリッとひっくり返せないのか？と、ふつうの人、我々は思っています。

次に捧さんに質問です。

一､「捧」さんという姓について、そのルーツ、民俗学的なとか。

一、「高野山大学」（教鞭をとっておられること)との御縁について。真言密教や空海や、又宗教を学ぶ人達や高野山内の僧侶の方の政治学への関心について、前々から興味を抱いています。

一、お住居が吹田市の由、高野山までの時間と距離、それら“移動空間”を御自身がどのように捉まえておいでなのでしょうか？
不躾かも知れませんが、個人生活の内容ではなく、例えば雑沓、乗物、風景の中での「おつむの世界」とかです。

以上、朝の新聞から、次々と書きました。ご多忙と存じますのでいつか機会があれば、沢山の方々と共にお話伺えれば、おもしろい事と願っています。

捧　様

平成一六年十二月十五日

『哲学カフェ』と『マルセル・デュシャン』

――「通信」第３０号から

松尾　猛省（会員）

先号の五福久雄さんの「哲学」と関わってを読んでいて、日大通信のＯＢの同窓会が「哲学カフェ」を立ち上げたという記事を興味深く読んだ。「哲学カフェ」…哲学になじむものにとって、なんとも快い響きである。その名は、パリを起点にフランス全土に拡大しているカフェ、フィロから拝借したとある。

カフェといえばサンジェルマン・デプレ界隈のカフェでサルトルが、嘗て、いりびたり議論していたという店に入り往時をしのんだこともある。

いつも思うのだが、向こうのカフェというのは、なんとなく寛ぎ、そこはかとなく議論でも花咲く雰囲気があり、はなし好きの人々の相が目に浮かぶ。

彼らのよりどころはカフェであるかのように、繁華街のカフェはいつも老若男女いりびたりで笑顔や饒舌に花を咲かせている。

学生街のカルチェラタンからノートルダムを望む中心地に並ぶカフェはその際たるものであろう。店前の広場や街路にまでぎっしりと椅子を並べ、日の長い夏などは室内よりも彼らは外のほうに好むかのようにそこに群がり、外気にふれながらコーヒーやビールをたしなむ。

まさに、絵になる風景である。絵になるといえばやはり金髪の淑女と語り合うカップルの青い眼や小麦色の透き通る肌、流行の先端をいく衣裳を軽く着こなしたパリジャンの横顔を掠めとるのもそんな場所である。が、パリのカフェはそういう人たちと対照的に黒一色のニグロ系の黒人や、黄色系のアラブ、東洋系の幾多の民族が混在しているところがまたパリの特色であり面白い。

まるで、民族展にでも出くわしたような錯覚に捉われるのも、また、メトロに乗ってもいち早く眼にとまるのは、その光景である。

早朝に乗ってもあまりスーツ姿の勤め人の姿が見えないのはどうしたことなのか、たいがいがジーンズ姿のラフな姿が多い。

あれは何人であろうか、スペイン系かいや、イタリヤ系か、アメリカ人ではないと勝手な思い込みと想像をたくましく弄ぶのもメトロでのしばしの漫遊であったりする。

とんだ思い違いに失望と赤恥をかくのは、東洋系の顔立ち、その目元や姿、形はてっきり日本人だと、思わず声をかけ、相手から中国語や韓国語、時には英語まで返って来てとまどう事しばしばであった。その先にもともとひとつのものが、枝分かれ、分派してきたものに過ぎないことを知るのみであった。

「カフェ哲学」はまた「カフェ文化」でもあるが。その風土の違いなのか、あちらのカフェにはどこにもカウンターがあり、カフェの常連客はたいがいそこに陣取り好きな飲み物を注文して立ったまま、しばしのひと時を過ごす。またそのほうが料金も座った時のほうより割安となっているので、常連の溜まり場でもある。日本でいう立ち飲みである。ラッシュはやはり勤めの退ける五時から六時ごろである。

酒はやはりひとりで呑むものでなく、ビールやワインのほか、色とりどりの琥珀色の液体を口にしながら、隣どおしや、気のおけないどおし憂さを晴らしたり、時の話題に花咲かせる。

残念ながら私は言葉の障壁もあって、彼らが

どんなことを喋りながら酒を愉しんでいるのか、知るすべもないのであったが、それだから傍らのテーブルから彼らの後姿に見とれながら寸刻の憩いを嗜むしかなかったのであるが、その合間にスケッチ帳を取り出し、ペンを走らせるのを唯一の日課でもあるかのように、いつもの指定席に陣取り振舞っていた。

そこはホテルから少し下がった市場筋に建ち並ぶお馴染みのカフェである。カフェのムッシュは心得たもので私が席に座ると「ヴァン・ルージュ？」また赤葡萄酒？ときく。その葡萄酒をちびりやりながらいつまでも居座り寛いでいた。

私がそのカフェで印象に残って忘れられないのは、年老いた婆さんだった。齢七十過ぎぐらいの老女が毎晩同じ時刻に、ひとりテーブルに座り、度のきついリキュール酒を細長いグラスに注いでもらい飲んでいた姿が忘れずに残っている。もう髪の毛も色褪せたなかの老女の眼はどこか孤独の渕に沈んだ陰影を漂わせ、ひとり静かに黙々とリキュール酒を呷ってはもの思いに沈んでいた姿が脳裏に刻まれている。やがて、そのグラスを干すとおもむろに立ち去っていたが、翌日また同じテーブルにすわり同じ物を飽きずに飲んでいるのでいるのであった。

私はスケッチの手をしばし休めて老女に目をやりながら、連れ合いを亡くした老女の寂寥が追憶の亡霊を蘇らさせ、過ぎ越しかたを慈しむ心もさざなみのように押し寄せていることだろうと、あらぬ思いに私もまた引き攣られたように漂わせているのであった。

そんな中にも、犬を連れた買い物帰りのかみさん連中がどかどかと入ってきて、カウンターに並び、ビールを呷っている姿だ。彼女たちは快活でよく喋る。明け透けで一種楽天主義のように見えるのも東洋人の皮相な見方なのか。いずれにしても、日本では滅多に見られない光景に見とれているのであった。

日本でも最近は少しずつ屋外に椅子を並べる喫茶店もちらほら眼に触れるようになったが、概して日本のカフェはどうしてこうも陰気な雰囲気が漂うのだろう。喫茶はこういうものという従来の観念から抜け出ていない傾向もあるのか。

なにもかも欧州化せよというのでもないが、飲む場所が居酒屋という固定観念から抜け出ることも必要なのではと、その意味では欧州並に気軽にカフェに飛び込みカウンターでビールやワインを呷る店があってもいいのではと、カフェをより大衆化するためには、それくらいの思い切ったこともあっていいし、やがてはという思いもあるが、そういう風土に馴染みのないサラリーマンや大衆がそれに定着するには、なにがしかの時間も必要かと思う。

五福さんの「哲学カフェ」から思わぬ方向へ反れたようだが、そういう溜まり場的なもの、そこへ行けばそれなりのカフェ文化が嗜めるそんな場所がこの大阪にもひとつやふたつあってもいいのではと思っている。ソクラテスが跣のまま広場に立ち、道行く人々に話し掛けていたように、そんな場が現代の哲学カフェに衣替えできればとの思いも過ぎるのである。

マルセル・デュシャン

次に眼にとまったのが「高根英博　デュシャン！破壊！破壊！破壊！」だった。

マルセル・デュシャン、一体この男は何ものなのか、私がこの男を知ったのは絵を描き始めて間もない頃だった。研究所仲間が彼の本を読んでいた。現代芸術の始祖とももてはやされる男である。生まれが 1887 年、19 世紀晩年の男で死去は 1968 年であるから 40 年余り前に亡くなっているが、15 歳で絵を描き始めアメリカに渡り 20 年後には、もう絵画の世界ではやることはすべて成し遂げてすることがないからと、チェスをやって過ごしたという謎めいた男である。

そのデュシャン展が大阪の国際美術館で催すというので初めてそこへ足を運んだ。あの星の科学博物館のすぐ近くに、これまた立派な美術

館が出来ていたのでびっくりした。地下三階、エスカレーターでどんどん下るうちにデュシャン展に行きついた。

デュシャンの名を永久にせしめた「階段を下りる裸婦」「汽車の中の悲しい青年」の前に立つ、写真でいえば断続写真のように裸婦の裾野が何重にも重なり合っているようなそれである。汽車の中の悲しい青年の顔は平面的に分解されて、中央にそれらしき顔が映像として浮き出ている。それを見ながらデュシャンの言葉を反芻する。

「私は絵画の物理的側面から逃れたいと思った。視覚的な産物でなく、観念に惹かれたのだ。私は絵画をもう一度、精神の為にしたいと思った」

彼の言葉は続く、油絵具の匂いに魅せられてカンバスの上に観念の構築を忘れてしまった画家の作品を「鼻の芸術」と呼んだ。網膜だけを偏重するこうした作品の印象派はピカソとマチスで頂点に達してしまった。この二人の作品は独創的だが、それでも「網膜的」であったと。また「19 世紀後半のフランスには〈絵描きのように頓馬な〉というような言葉があったが、眼に見えるままにしか描かないような画家は，じっさい頓馬なのだ、私の場合は思考過剰のところもあったが、私はその時、自分が考えていたことを描いたのだ」と。

だが、絵画それ自体が網膜上の目で見て愉しむ芸術である以上、その基盤そのものを否定してしまっては、絵画そのものを否定、破壊する以外にない。

もう、それをいってしまっては、キャンバス上に何を描いても網膜上のそれ以外のものでなく、いわば彼のいう鼻の芸術とならざるを得ない。

それとも、また彼の提出したレディメイド、即ち出来たての既製品の「便器」だとか「コーヒー引き器」の類となり、自分がそれにサインするだけの見る側にとっては、何の面白味もない味気ないものとならざるを得ない。

もうそこまで来れば彼には為すこともなく、毎日チェスを日長一日愉しむ以外になく、またそれで生涯をおくれた恵まれた境遇にあったことが、羨ましくも思えるのであった。

しかしまた、その反面 20 世紀絵画史上に最も大きな影響を及ぼしたのが、かのマルセル・デュシャンであるという評価はこの先も永遠に覆されることもないであろう。

グラムシ。「ウラメシ」「イライラ虫」つのる

破偈否偈弥　徹（会員）

大阪哲学学校の会員の皆さま。

新年「酔々」にておめでとうございます。

さて、グラムシといえば、「バルタン星人」の先駆的研究や、フランスのマチスはじめとする「野獣主義」の先端的評論家として著名である。

第二次世界大戦前のイタリア、ムッソリーニ治下で獄中に 12 年、獄内の過酷な環境からか出獄して 6 日後に 46 歳で死亡したグラムシが、季報「唯物論研究」第 90 号に特集されている。特集はこれで 5 冊目？。

このグラムシ特集号を手にしたり、他のグラムシ研究者の諸著作・論文を読むと、「マルクス好者」であるとともに、「グラムシ好者」でありたいと思っている破偈否偈弥の徹っぁんは、「グラムシ、『ウラメシ』『イライラ虫』つのる」との状態陥る。

なぜ「ウラメシ」なのか。「イタリア語原著。こんなん絶対無理。」「ドイツ語版。やめてー！」（約 6 万円）「英語版。これでも無理ちゃうか。」語学力欠・金欠、これが「ウラメシ」の原因。

それではなぜ「イライラ虫」つのるのか。研究諸論文では、「Q ** § ** には『******』とある。これは初稿であるＱ * § * にある『*******』を加筆修正したものであり、獄中でのグラムシの思考の展開を証拠付ける。」てな論及が出てくる。しかし、初級の「グラムシ好者」には、上記の Q ** § ** にたどり着けないのである。「さよでっかぁー」としか言いようが無い状態に追い込まれる。これが「イライラ虫」の原因。

グラムシが獄中で執筆した草稿の全数は 2092（松田博氏論文から）とのこと、この内日本語にまとまって翻訳出版されたのは、合同版『グラムシ選集』に採録されているのが約６００草稿。大月版『グラムシ獄中ノート』第一巻に採録されているのは 308 稿。しかも合同版『グ選集』は「トリアッティー（スターリン主義）的改変が加えられている。」として評判が悪い。なおかつグラムシの草稿は獄中で学生用ノートに書かれているのだが、合同版と大月版ではこのノート番号が第 7 ノートを除いて完全に一致しない。

なまじっか合同版『選集』を手に入れた「グラムシ好者」にとっては、益々大混乱。「イライラ虫」がつのることになる。

大月版『獄中ノート』を参照して、ノート番号の不一致の理由がようやく理解できた。合同版のノート番号は、ファシストに没収されるかも知れない状況下でグラムシの義姉タチアーナが付けた番号によっていること。大月版は、１９７５年にイタリアで出版され、執筆順を確定した『校訂版』によるノート番号であること。

これで「イライラ虫」突破の第一関門が開いたような。まあ「のーんびり行こうよ。いつまでも。」といったところか。

会員の皆さまには、すでにご承知のこととは思いますが、「ノート番号『合同版』・『校訂版』対照表」（注）をご参考までに。

「酔々」で、グラムシ山への突撃は疲れる。

（注）「対照表」をご希望の方は、破偈否偈弥徹さんにお申し出ください。

タイムマシン

時間の設定は　最初の生物が発生する直前にしておいた
水平線のあたりは　ほのかに白んでいるが　まわりは暗い
未来からの闖入者である私は　保護服を着て
生命探知機をさげ　酸素の希薄な大気のなかへ降りたった
そら耳か　子供の泣き声が聞こえている

生きているものは
気がついたら　自分が雌か雄かで
その上　自我という厄介なものを背負わされた
うす暗い
　　火がついたような赤ん坊の泣き声が聞こえている

親が死んでも　子供が傍らにいて
死に絶えずに生きてきた
この仕掛けの狙いは　意識の継続で
生きているものは　このための道具
うす暗い　子供のすすり泣きが聞こえている
いたいけな子供の姿を見るたび
どれだけ辛い思いをして　生きてゆくのかと胸が痛んだ

意識の継続だと分かっても
その先　何を目指しているのか　分からない
自我に引きずられて　ただ生きてゆくだけ
辛い思いをしてまで　生きて行く義理はない
この世から左様ならしよう
最初の生物さえ焼却すれば　自我に縛られていても
何もかも綺麗に帳消しになる
うす暗い　泣き叫んでいる子供の声が聞こえている

生命探知機が点滅をくりかえして
　　生物の発見を知らせている
位置を確認すると　レーザー光線銃の照準を定めた

上野山　定由（参加者）

演歌のプリンス・氷川きよし（続）

義積　弘幸（会員）

※文中にもあるように、これは筆者が病院誌『やまびこ』に掲載した文章を、ご本人の希望により一部加筆修正のうえ再録したものです。【編集部】

芸名・氷川きよし。一九七七年九月六日生。血液型はＡ型。出身地、福岡。身長一七七センチ、体重六二キロ。デビュー年、二〇〇〇年。デビュー作「箱根八里の半次郎」。

そして、デビューのきっかけは、平成七年十二月ＮＨＫ・ＢＳ「歌謡塾あなたが一番」に出演し、審査員をしていた作曲家・水森英夫先生（デビュー曲の作曲家でもある）にスカウトされた。（公式ホームページによる）

さて、いきなり、氷川きよしの略歴を書いたのは、前号「２００３・演歌のプリンス・氷川きよし」を発表した時、私に対する最高の女性批評家Ａ・Ｎさんに「少なくとも氷川きよしの経歴くらいは書いておくべきよ」と言われていて、それに応えるためであった。

ところで、ここからは、病院誌『やまびこ』三九号に書いた後の彼の軌跡をたどってみたい。

その中で、特筆すべきはＣＤアルバム『演歌名曲コレクション･白雲の城』『男気（おとこぎ）』を出したことだろう。それとＣＤシングルでは中村玉緒とのコミカルなデュエット「ラブリィ」（ビデオもあり）と。

二つは全く方向性の違った作品なのだが、芸能通に言わせれば、そういう幅を作ることで、歌手の枠、芸の幅、人間性の豊かさが出るのだそうである。

しかし、「ラブリィ」はＴＶで二度ほど視聴したが、買うことまではしなかった。シングル一枚千円位。それでも、やはり金が惜しい。

けれども、アルバム『白雲の城』、『男気』は、買った。でも、印象的なのは、冒頭、詩吟、春望（「国破れて山河あり、城春にして草木探し」まで）を入れている『男気』の方だろう。なぜなら、『白雲の城』は「きよしのズンドコ節」「チヤンチキおけさ（注・三波春夫のカバー）」「男の純情（これもカバー曲）」が良いくらいで、他の歌はうまいが聴きなおす気を起こさせるアルバムでは私にはなかった。（が、ミニ写真集付きだから、その面で好きな人には必見！）　しかし、『男気』は表紙からして違う。同じ「氷川きよし」なのだが、メイクのうまさ、カメラマンのうまさによるのだろうか、『男気』というだけあって〈オトコ〉を感じさせるのだ。

そして「ああ、上野駅・東京の灯よいつまでも・人生劇場・大利根月夜・人生一路（全てカバー曲）」と何度も聴きたくなる曲の編成になっているからだ。これは、寝ながら（私は音楽を聴きながら睡眠薬が効くのを待っている）毎晩ぐらい聴いている。それ程魅力的である。だから、私のオススメである。

今回は、ここで、いったん終わりにしたい。といっても次号に、また〈氷川きよし〉について書くかどうかわからないので、本稿もじっくり読んで下さい。お願いします。（二〇〇四･七･三）

（注）「カバー」とは、先人が歌った曲をアレンジして再び世に問うことを言う。

【補記】

氷川きよしは、二〇〇三年レコード大賞・最優秀歌唱賞、二〇〇三年、四年の有線放送大賞のグランプリをとっている。（二〇〇四・十二・三〇加筆）

問われるべきは〈なぜ人を殺すのか〉である

平等　文博（会員）

前号に「人を殺してはならない理由をめぐる疑問」という一文を掲載したところ、「展開不十分で主張がよく分からない」との批判をいただいた。この問題については以前に、少年による殺傷事件が相次ぎ大きな社会問題になったころ、「通信」で私見を述べたことがあるので、それを前提に読んでいただけると安直に考えていた。しかし、はるか以前の拙文を記憶いただけていないのは当然で、埋め草とはいえ舌足らずな文章になってしまったことをあらためてお詫びしたい。そのうえで、若干の補足を以下に述べる。

前回私が呈したのは、〈生き物を破壊する（殺す）ことはできても作ることはできない〉という、養老孟司さんの「人を殺してはならない理由」についての疑問であった。その内容は繰り返さないが、不十分との指摘を受けたのは「じゃあお前はどう考えるのか」という点である。

私が思うのは、〈人を殺さない〉ことに理由が必要なのかということである。私は、〈人を殺すこと〉にこそ理由が必要な（あるいは理由がある）のであって、人を殺さないことに特別な理由は要らないと考える。

人を殺すことが是認される場合として、今日では、差し迫った生命の危険を回避するための個人の正当防衛、侵略から自国の安全を守るための防衛戦争、社会の安全を確保するための死刑制度があげられる。そのうち、戦争と死刑については容認できないとする意見も強く、私自身もその一人である。しかし、いずれにせよ、人を殺すことを認めるためにこそ十分な理由が必要だというのは、現代の社会では共通の了解になっているのではないだろうか。

「いやそういうことではなくて、他者による是認や否認などとは関係なく、人を殺したいという欲求や衝動が個人のうちに芽生えた時に、何がその歯止めになるのかがここでの問題なのだ」と言われるかもしれない。それならお聞きしたいが、そのような殺人衝動に駆られた個人が（集団でもいいが）、「人を殺してはならない理由」の提示によって殺人を思いとどまるなどということが現実にありえるのだろうか。「お前が今まさに殺そうとしている人の命を、お前はつくることができるのか？　できないのであれば殺すべきではないだろう！」と言われて、「はいその通りです」と思いとどまる人がいると私には思えない。

だからそこでも問われるべきは、なぜ〈人を殺したい〉あるいは〈殺してもかまわない〉と思えるのかという原因あるいは条件であって、「〈人を殺してはいけない理由〉についての無知」がその原因・条件だとは私は思わないのである。

「人を殺したい」と感じる原因としては、人と人の連帯や協力よりも対立や競争を成長の「エネルギー源」とする現代社会のあり方、他者との絆を分断され孤立する人間たち、不公正や格差の拡大によって蓄積される他者への妬みや社会への恨み、奪われた自尊感情を暴力的支配によって埋めようとする暗い情念、そして、それらを煽り正当化するさまざまな差別イデオロギーがあろう。そうしたものこそをわれわれは問題にし、「人を殺したい」と思わせる諸条件と立ち向かわねばならないのではないだろうか。

そのように考える私には、「人を殺してはいけない理由」についての養老さんのおしゃべりは、最大限ほめたとしてもいわゆる「スコラ的議論」でしかない。

大阪哲学学校 2004 年度（第 10 回）総会報告

大阪哲学学校運営委員会

標記総会を２００４年１１月１３日（土）午後３時半～５時半、尼崎労働福祉会館会議室にて開催しました。会員総数４９名のうち、出席１０名、委任状提出２０名の計３０名の参加で総会は成立し、運営委員会提出の議案を審議、一部修正のうえ以下の内容（要旨）を承認しました。（文中敬称略）

１）活動全体の反省と今後の課題・方針

【会員】

会員総数４９名（前年度比ー１）：一般会員２３名（＋－０） 維持会員２６名（ー１）

【企画】

・前総会以降の夏合宿を含む催し数は２０回。

・昨年度とほぼ同じペースで継続的に催しを開いたが、参加費収入から推計されるのべ参加者数は全体として昨年度よりもさらに２割程度減少している。今年度は山本校長、田畑参与の著書出版を受けての読書会・連続講座を各３回（計６回）もち、それぞれ比較的多くの参加者を得たが、一方で単発の催しは参加者が予想を下回ることが多かった。

・催しの内容面では、昨年度と同様に、哲学・思想関係のテーマを主軸にしながら政治経済あるいは社会問題関係のテーマをバランスよく開催するという方針に基づいて催しを設定した。昨年度スタートの「日常生活世界の哲学」を今年度は実施できなかったなど問題もあるが、哲学・思想関係のテーマを主軸に置くという方向性自体はよかった。

・参加者の減少に歯止めをかけることができない理由としては、土日に各種団体の催しが集中するなかで、哲学学校の独自性や持ち味が企画面や広報面で充分に打ち出せていないという問題がある。

・本総会の委任状に記載された希望などからも、「哲学を勉強したい」という要望が強い。新たに企画している「〈知の歴史〉入門講座」を来年春にはスタートをさせ、哲学学校の柱となる催しへと育てていく。

・政治経済あるいは社会問題関係のテーマについて、社会運動の第一線で哲学的・思想的に自己反省を加えつつ活動してきている方々の話は、哲学と生活現場の結合という視点からも非常に面白く、また哲学学校の催しの特色としても重要であり、今後も継続していく。

・以上のことを踏まえて、「哲学・思想関係のテーマを主軸にしつつ政治経済・社会問題関係のテーマをバランスよく開催する」という基本的方向性の内容のさらなるバージョンアップを次年度は追求する。

【広報】

・広報面では、ホームページやちらしの活用、新聞掲載の依頼に引き続き努力するが、不特定多数に向けての広報だけでなく、哲学学校２０年のストックを活かして他の大衆的な市民運動諸団体と互いの活動を紹介したり参加を呼びかけたりし合うなど、自分自身のアイデンティティをしっかりもった上での運動のネットワークづくりをしていくことに、哲学学校としてもこれから積極的に取り組む必要がある。

【運営】

・運営委員会体制へ移行して１０年になるが、多忙や体調不良などで運営委員の活動条件が非常に厳しくなっている。委員それぞれの限られた条件の中で哲学学校の運営を進めざるをえない。電子メールの活用など、体力の現状に合わせた

「省エネ」型の運営で当面乗り切るしかないが、若い世代の会員の確保と運動の継承がこれからの大きな課題である。

２）個別分野の状況と課題

1.　広報活動

・ホームページの内容充実と運用

　新しいホームページの運用が開始され、新たに会議室が開設されたが、内容（コンテンツ）の充実はこれからの課題である。哲学学校関連の資料や年譜、「通信」のＰＤＦによる掲載、他の市民運動団体とのリンク設定など、伊元委員を中心に鋭意取り組む。

・哲学学校紹介の広報用小冊子

　哲学学校を紹介するパンフレットを作成し、広報活動や他団体との交流の媒体とする。内容やデザインについては高根新委員が中心になって案を練り、運営委員会で検討する。

2.「通信」

・この１年間に２６号～３０号を発行した。時期と内容については順調に発行できているが、執筆者の固定化・常連化傾向は改善されていない。また、原稿の集まりも一時ほどの勢いを無くしてきている。会員への投稿呼びかけや個別の原稿依頼を強化するとともに、企画や編集の面での工夫もする必要がある。

・各催しの要旨紹介の掲載については、余力がなく実行できておらず、引き続き課題である。

３）財政

・参加費収入の減少を含め、収入が全体として縮小しているのに対して、支出はホームページのドメイン料などが加わってやや増加し、結果としてわずかではあるが赤字決算となった。ほぼ収支均衡で、この種の運動としては比較的財政は健全な状態を維持しているとはいえ、収入の減少は参加者の減少を示しているので、参加費と会費の増収に努力したい。

４）2005 年前半の催し

・１月２２日　新年会員・参加者交流会

・２月１２日　木村　勲　※次頁を参照

・２月２６日　木村倫幸

「新しい哲学入門書の紹介と分析」（仮題）

・３月１２日、１９日、４月９日

山本晴義　〈知の歴史〉入門講座（その１）

「Ｊ・Ｓ・ミルとロバート・オーウェン

—グラムシ的視点から」

・４月２３日　平等文博（心のノート批判）

・５月１４日　未定

・５月２８日　未定

・６月１１日、２５日、７月９日（日程交渉中）

西川富雄　〈知の歴史〉入門講座（その２）

「ドイツ観念論の哲学」（仮題）

・７月２３日　未定

・８月２７日～２８日　夏期合宿（予定）

５）第１０期運営委員会人事

・校長（兼参与）：山本晴義

・参与：木村倫幸、笹田利光、田畑 稔

・運営委員長：平等文博

・運営委員：伊元 勇、高根英博、中村 徹（会計監査）、西山 覚、橋本直樹、山口 協

お　知　ら　せ

○大阪哲学学校催しの録音 CD-ROM

哲学学校の催しの録音を、個人の学習のために希望される方に、ウィンドウズ・メディア・プレイヤーで聴ける CD-ROM をお貸しします。費用は実費として五百円を基本とします（関係資料とも）。なお、貸出対象は原則として会員に限らせていただきます。会員登録は随時受け付けています。

○申し込み・問い合せは催し受付または kihou-ha@xpost.plala.or.jp まで

● 次 回 の 催 し 案 内 ●

与謝野鉄幹と『文壇照魔鏡』事件

―言論史的視点から―

講師・木村 勲さん

（神戸松蔭女子学院大学教授、元朝日新聞大阪本社学芸部）

◆2月12日（土）午後1時半～5時半ごろ

◆尼崎労働福祉会館（阪神尼崎駅下車、駅西の南北道路を北へ徒歩10分）

◆参加費：千円（維持会員五百円）

《 講 師 よ り 》

1901 年（明治 34）３月、『文壇照魔鏡』なる 1 書が刊行された。それは輝かしい文壇の新星、与謝野鉄幹の人間性・行状を、とりわけ女性・経済問題を柱に激しく非難する内容であった。ところが著者名、出版社名、その所在地など全て架空のものだった。しかし、新聞・雑誌は概ね同調の立場をとり鉄幹糾弾の砲列をしいた。スキャンダラス・キヤンペーンは半年余に及び、1 年前に刊行されて日の出の勢いだった雑誌「明星」は急落する。明治文壇･言論史に著名な文壇照魔鏡事件である。

従来、執筆者探しに終始した感があるこの事件を、鉄幹の対応を軸に再検証する。今に至る日本の言論界に、それは意外に深い影を落としているように思えるからである。

大阪哲学学校活動日誌（「通信」30 号発行以降）

2004. 10.30.「大阪哲学学校通信」第３０号発行

10.30.「プラグマティズムからローティまで――アメリカ思想の展開」
…… 講師・木村倫幸

11.13. ２００４年度（第１０回）大阪哲学学校総会
活動総括・方針と次年度の企画、人事 (校長・山本晴義 / 参与・田畑 稔、笹田利光、木村倫幸 / 運営委員長･平等文博 / 運営委員･伊元 勇、高根英博、中村 徹、西山 覚、橋本直樹、山口 協)

11.20.「〈農業・協同組合・地域社会〉の現在」……講師・本野一郎

12.11.「思考実験で考える政治学入門―非正統的アプローチ ……講師・捧　堅二

12.19. 定例運営委員会